

## 新春対談

### 「日本医師会と日本獣医師会が学術協力の推進に関する協定締結」

昨年11月20日、本会は公益社団法人日本医師会と学術協力の推進に関する協定を締結し、高病原性鳥インフルエンザをはじめとする多くの人と動物の共通感染症の流行制御や、食品の安全性確保に関して、医師と獣医師が緊密に連携し、安全で安心な社会を構築推進の取り組みを進めているところであるが、このたび横倉日本医師会会長と本会藏内会長が、本協定書の締結、さらには今後の取り組み等について、新聞紙面を通じて対談を行ったので、ここに紹介する（朝日新聞 九州版 平成26年1月1日）。

日本医師会  新春対談  日本獣医師会

## 日本医師会と日本獣医師会が学術協力の協定締結

### ～人と動物の共生をリードする日本の医療～

人と動物の共生をテーマに医療連携や、ますます進む医療の国際化など、日本の医療の現状、課題、未来について日本医師会会長 横倉義武氏、日本獣医師会会長 藏内勇夫氏にお話しを伺いました。

#### ——相互連携が生み出す

人と動物の未来の医療について、それぞれの立場から今後の医療の可能性等をお聞かせください

**横倉氏** 今世紀に入り、ウエストナイル熱、重症急性呼吸器症候群（SARS）、鳥インフルエンザ、豚インフルエンザといった動物由来感染症が世界の各地域で発生し、尊い生命が失われています。ペットの種類も多様化し、改めて動物由来感染症が問題となる中、大切なこと

は人と動物の共通の感染症について正しく理解し、その予防を図ることです。2012年10月に、世界医師会と世界獣医学協会が、動物由来感染症対策、食の安全の向上等のために協力関係を構築するための覚書を締結しました。これを受け、2013年11月20日に、公益社団法人日本医師会は、公益社団法人日本獣医師会との間で、学術協力の推進のための協定書を締結しました。現在はその第一歩を踏み出した段階ですが、今後の双方による具体的な協議の中で、安全で安心な社会の構築に向けた施策



(公社)日本医師会 会長  
**横倉 義武** (よこくら よしたけ)

1944年福岡県生まれ。69年3月久留米大学医学部卒。90年医療法人弘恵会ココラ病院理事長兼院長。02年福岡県医師会副会長。06年福岡県医師会会長。10年日本医師会副会長。12年第19代日本医師会会長に就任。



日本医師会と日本獣医師会の協定書の調印式  
(東京の明治記念館にて)



(公社)日本獣医師会 会長  
**藏内 勇夫** (くらうち いさお)

1953年福岡県生まれ。79年3月日本大学農獣医学部獣医学科卒。87年福岡県議員。93年福岡県獣医師会会長。96年日本獣医師会理事。01年第54代福岡県議員会議長。05年日本獣医師会副会長。10年九州大学大学院博士課程修了。13年第12代日本獣医師会会長に就任。

を打ち立てたいと思っています。

**藏内氏** 近年、世界の医療及び獣医療等関係者の間で、「One World, One Health」という概念が普及しています。これは、人の健康と動物の健康を守る上で、それぞれが独立して存在するのではなく、自然環境の健康である保全や修復も含めて、三者を一体的に対応することの重要性を指摘したものです。医師会と獣医師会が連携を取ることにより、人と動物の共通感染症などの「医療と獣医療に共通する課題」について医師と獣医師が協力し、国民により安全で安心かつ効率的な対応を図ることが可能になります。今後、両者が協議を行うための環境を整備し、具体的な連携方策を検討してまいります。

### ——国際化が進む日本、直面する感染症対策とは

**藏内氏** 20世紀におけるワクチンや抗生物質の開発と普及は、感染症を克服するうえで大きな役割を果たしましたが、その後のAIDSをはじめ、鳥インフルエンザ等の出現や、ノロウイルス等による食中毒、BSEの発生、薬剤耐性菌の出現等は私たちの生活に不安をもたらしています。

国際化の進展により、人の移動や物流が盛んになるほど我が国への感染症の侵入の機会は増大しつつあります。これらの疾病の多くは「人と動物の共通感染症」であり、獣医師と医師が疫学情報を共有し、連携することが肝要です。また、一度発症すればほぼ100%が死に至る悲惨な狂犬病防疫の重要性を訴え、その防疫について日本医師会と連携し、人と動物の共通感染症の問題に対処するため、情報交換や防疫現場での連携等について検討を進めていきます。

**横倉氏** 動物由来感染症の実態と正しい知識を知ってもらうため、会内に感染症危機管理対策室を設置し、「動物由来感染症ハンドブック～ペットからの感染を防ぐために～」を作成・配布しました。一方、2009年に世界的に流行した「新型インフルエンザA」等の感染症発生の際、人の移動が頻繁かつグローバルに行われている現状では瞬時に拡大、蔓延する可能性が高く、当時多くの医療機関が混乱した反省を踏まえ、2013年4月に新型インフルエンザ対策等特別措置法が施行され、日本医師会は同特措法に基づく指定公共機関に指定されています。日本獣医師会と連携、協力して、「予防」という視点から何ができるか、何をしなければならないかを模索していくことが肝要だと考えています。

### ——医療先進国日本、2014年の課題と取り組みとは

**横倉氏** 国民の幸福の原点は健康であり、病に苦しむ人がいれば、何としてでも助けたいというのが医師の願

いです。また、私たちの願いは、「必要となる医療が過不足なく受けられる社会づくりに尽きる」です。

日本医師会は、国民皆保険制度の堅持、崩壊の危機にある地域医療の再興に向け、さまざまな活動を展開しています。その中で、国民の生涯にわたる健康で文化的な明るい生活を支えることによって、健康寿命の延伸を進め、「社会から支えられる側」であった高齢者が、「社会を支える側」になることが出来る社会の構築を医療分野から行っていきたいと考え、昨年策定した「日本医師会の綱領」の中でも謳っています。そのためには、地域住民との信頼関係を構築し、地域における医療を取り巻く社会的活動、行政活動に積極的に参加するという社会的機能をもつ「かかりつけ医」の役割が非常に重要です。かかりつけ医を中心とした地域の医療資源との連携を行うことで、切れ目のない医療・介護の提供を行うことが可能となると考えています。

**藏内氏** 犬や猫等の家庭動物が多くの人々の間で家族の一員として受け入れられ、獣医師が高度で専門的な獣医療を提供するための体制整備が求められる一方、牛、豚、鶏等の産業動物診療獣医師や公務員獣医師が不足し、職域や地域による獣医師の偏在が顕著になってきています。獣医師が不足している職域、地域における若い獣医師の就業を促進するため、処遇の対策や、やりがいと魅力のある職場にするため、方策や獣医学生への動機付け等について様々な提言を行っており、今後も積極的に改善に努めていきます。また、この課題については、新規獣医師の半数を占める女性獣医師の就業支援が解決の一助となると考え、現在検討を進めています。

動物愛護活動が高揚する中で、昨年改正された動物愛護管理法の円滑な施行、特に動物の愛護と管理の基礎となる飼い主の責任を明確にするため、個体識別装置であるマイクロチップの普及にも取り組んでいます。生物多様性の確保については、地球環境保全の観点から獣医師・獣医師会の関わる重要な役割の一つと認識しています。「動物を救護し、苦痛を取り除く」という獣医師の本来の仕事と、傷ついた特定外来生物を保護し、病院に持ち込む子どもたちへの具体的な対応策について整理し、構成獣医師に示す予定です。

### ——医療の未来を切り拓く

#### 明日を担う若手育成について

**藏内氏** 現在の獣医界は、若く才能がある前途有望の人材が多く所属しています。獣医学科は受験生にとって人気のある分野であるため、厳しい競争を勝ち抜いて入学してきた学生たちの能力や志は高く、新規獣医師の進路指導を適切にすれば、我が国の獣医界の将来は、素晴らしいものになると期待しています。

課題は、獣医学教育環境のさらなる整備・充実です。獣医学教育が6年制に移行してから30年を経過しましたが、獣医学教育体制は、海外先進国に比べて明らかに改善の余地があり、これまでに、さまざまな角度から取り組み、提言を行うとともに、研修会、講習会、学会開催等の事業を積極的に行ってきました。文部科学省が設置し、検討を続けている「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」にも参画し、施策の実行や、今後も次世代の獣医師育成に重要な獣医学教育の改善・充実を最優先課題の一つとして取り組んでまいります。

**横倉氏** 医師としての能力・適正に留意した人材選考が重要と考えています。単に「受験学力」が高いから医学部への進学を決めるのではなく、医師として活躍するのに十分な能力を持ちつつ、明確な目的意識を持った者や医師としての適正を持った者が、医師になれるような人

材選考システムを作る必要があります。その上で、最も重要なことは、患者の立場に立った医師の育成です。医療・医学は日進月歩であり、学部教育や卒後研修で学ぶ内容は医療の一部です。資質の向上を図り、患者に十分に医療を行うことが出来るようになるためには、生涯にわたり、学習することが求められています。日本医師会では、生涯教育制度を取り入れ、これら研鑽する場を設けており、医学生向け情報誌の発刊等も行っています。

---

同じ医療に携わる日本医師会、日本獣医師会がその垣根を越えた医療における連携、協力を図ることで、問題視される感染症等の具体的な打開策として大きな一歩を踏み出しています。今後も世界をリードする日本の医療界において、人と動物が共生して健やかに暮らせる医療の取り組みが行われていきます。